

財団法人

住吉隣保館ニュース

No.7

■編集・発行 財団法人住吉隣保館

■編集発行人 友永健三

財団法人住吉隣保館 〒558-0054 大阪市住吉区帝塚山東5-3-21

TEL 06-6674-3732 FAX 06-6674-7201 <http://www.sumiyoshi.or.jp/>

市民交流センターすみよし北・特別事業

～住吉さんと地元の1800年から学ぶ～

住吉さんの祭りと伝承

～歴史時代に至るまでの環境変遷や地形～

この号の内容

- 1 市民交流センターすみよし北
特別事業『住吉さんの祭り
と伝承』(1)～(6)
- 2 財団法人住吉隣保館の動き
(6)～(8)

講師 小出英詞さん(住吉大社権禰宜)

10月12日13時30分から「住吉さんと地元の1800年から学ぶ」の講座(市民交流センターすみよし北の特別事業)の第6回がもたれた。NPO法人かなえ会理事長池田外美雄さんの司会で、「住吉さんの祭と伝承」と題して住吉大社権禰宜の小出英詞さんのお話があった。日頃深く考えることもなく見ていた住吉さんの神事にまつわる興味深い伝承を、パワーポイントで絵図や写真を示しながら、分かりやすくお話し下さった。

(以下の文中パワーポイントの画面であることなどの注を入れていない。適宜読み取って頂きたい。またこの報告は当日の講演を事務局でまとめ、講師に手を加えて頂いた。)

はじめに

本日は「住吉さんの祭りと伝承」と題してお話したいと思います。住吉大社では一年にたくさんのお祭りがありますが、それらの大中小の祭りを合わせると130余りになります。祭りという、皆が集まり楽しく行事を行うようなイメージがありますが、その催しの中心には神様を祭る神事があり、歴史と信仰に基づいた伝統行事でありますので、単なるイベントではありません。ですから、一般の参拝客の皆様にご覧いただけるような神事もあれば、未だに非公開のものもあります。その中身もただお供え物をしているだけに見えて、一般的には面白みに欠けるかもしれないものもありますが、それらは見られることを前提としておらず、神様のためにご奉仕しているものであります。

住吉さんの祭りのなかでも、茅の輪ぐりや神輿が出る夏祭の住吉祭や、重要無形民俗文化財に指定されている御田植神事などがよく知られていますが、最も参拝客で賑わう時期でいいますと、やはり正月の初詣になります。

毎年初詣では、参拝客の人数がニュースになるほどですが、初詣の雑踏のなかで行なわれる新春の神事について紹介したいと思います。

踏歌神事(正月四日)

先ず紹介するのは、正月四日の踏歌神事です。正月の四日といえば、三が日もおわり官庁や企業などでは初出の日にあたります。当然住吉の社頭にはたくさんの参拝があり、神社としても多忙を極める最中に、ここで紹介する特殊な神事が行われます。



踏歌神事の様子

江戸時代に出された『住吉名勝図絵』にも登場していますが、写真のようにご本殿の前に二人が向かい合うようにして立っています。奥には梅の若枝を持った「言吹」という人が本殿を背にして立ちます。これに対して、手前には錦の袋に餅をいっぱい入れて抱え持つ「袋持」が立ちます。神事では、奥の「言吹」が三步前に進んで、「ふくろもち」と声を掛けます。それに応えるように「袋持」が同じく三步進んで「おおともよ」と発声します。これを3回繰り返して、ついに「袋持」が神前に進み、餅を数えながら供えます。その時は「ひい、ふう、み、よ、ご、と、万歳楽、万歳楽、万歳楽」と発声します。

以上が住吉さんに伝承される踏歌の儀であります。これは新春の初めに地を踏み固めて邪気を払う新春行事といわれています。なお、このほかに巫女さん（神楽女）の神楽舞、白拍子や熊野舞が行なわれ、神事の最後には餅まきがあり、福餅を授かりたい参拝客で賑わいます。

お手元の資料に『神道史大辞典』などの「踏歌神事」の解説には次のようにあります。「諸社において踏歌を中心として行われる正月行事。その起源は、平安時代、宮中において行われた踏歌節会で、中国よりわが国に輸入されて始められた。琴・琵琶・笛・笙・箏などによる拍子によって行われるが、少年によって行われるのを男踏歌、少女によるものを女踏歌という。集団の舞踊で地を踏み鎮めることを目的とする宗教的な意味を有するものと考えられる。あわせて、漢詩・催馬楽などの唱歌が行われた。」

つまり、古代の中国から伝わってきた新年の呪術的な儀式であるということです。これが宮廷の新年行事として行われてきましたが今は伝わっていません。古の宮廷では男踏歌と女踏歌があり、そのうち女踏歌は形式的に後世まで行なわれてゆきますが、男踏歌は平安時代の中頃には絶えてしまいました。しかし、一部の神社には男踏歌の名残が今も継承されており、住吉さんのほかにも名古屋の熱田神宮などに伝来しています。しかも、同じ踏歌でもそれぞれ違う所作を行っています。

住吉大社の場合、前に説明したように、戒さんと大黒さんが掛け合っているような光景であり、少し滑稽な印象を受けるものです。これに対して熱田神宮の場合は、舞人が4人出てきて正方形に並んで練り歩きます。つまり地を踏み固める動作を行い、つづいて舞があります。これらの違いを見てみると、古来の宮廷で行われていた踏歌の儀式のうち、二つの神社には別々の部分が伝承されているのです。廃絶した宮廷行事をうかがうことができる、とても貴重な事例でありましょう。

さて、資料にあげましたが、室町時代の大学者である一条兼良の『源語秘訣』には、「末代には千秋萬歳な

ど云うは、男踏歌の余風なり、後嵯峨院の御時にもはやりし事也」と書かれています。つまり、宮廷では絶えてしまった踏歌（男踏歌）が変貌して民間に伝わり、中世より「万歳（万才）」という芸能になったことを指摘しているのです。

資料の「浮絵万歳図」をご覧ください。これは安城市歴史博物館に所蔵されている「三河万歳」の様子です。現代では馴染みが無くなってしまいましたが、かつて全国各地では新年の初めに各家を訪問して祝賀をする伝統芸能がありましたが、それを「万歳」といいます。万歳は全国でひろく行われていましたが、特に三河（愛知県）のものが有名です。三河出身の徳川家康がこれを保護し、江戸幕府の新年行事にも参加していたとのこと。



浮絵万歳図

千秋萬歳から広まった萬歳は、三河・尾張・越前など各地に伝わり、今日伝統芸能として行われています。なかでも尾張萬歳は、なぞかけや滑稽な笑いの要素があったことから、この三曲萬歳の影響によって、大阪の万才が生まれたといえます。そして、しゃべくり漫才を成立させたのが、エンタツ・アチャコであるといわれています。ちなみに、横山エンタツさんは住吉大社のすぐ近所にお住まいでした。古代の踏歌からはじまり、萬歳、万才、漫才へと芸能が変遷していきましたが、その意外なところで住吉さんとのつながりを見つけてみました。今でこそ漫才は大阪の話芸として有名ですが、その起源にあたる踏歌の儀式の一端が、その地元の住吉さんの初詣の最中でなされていることは大変興味深いご縁だと思えます。

白馬神事(正月七日)

正月七日には白馬神事が行われます。白い馬と書いて「あおうま」と読みます。新春に白馬を見れば無病息災で一年間を過ごせるとの信仰があり、七草粥のこの日に、神馬が本殿を拝礼してまわり、神域を駆けめぐる神事です。



白馬神事の様子

現代では実際に神馬が置かれている神社はなかなかありません。むかしから住吉さんの神馬は名物でした。なお、今年は住吉大社御鎮座 1800 年ということもあって、5 月 8 日には、昭和 61 年生まれの老齢の神馬から、新しい神馬と交替しましたところ。そのことは会場でお配りしました社報『住吉っさん』第 17 号にも交替式の様子を載せています。

さて、住吉さんの神馬について様々な伝承があります。資料の「住吉神社神馬物語」をご覧ください。これは今の東住吉区田辺の歴史が書かれた『田邊町史』にある現地の伝承で、そこには「大昔神功皇后三韓征伐の時紙にてはりたる白馬を製して之れに乗りて進まれしに、その馬よく駈けたり。韓人之れを見て大いに称賛し、其下賜を乞ひて止まず、乃ち其の請を容れて、彼の地産の白馬と交換せられたり。」とあります。神功皇后が乗っておられた紙で作った馬を、現地の人の白馬と交換したという伝承です。「然るに韓人より得たる白馬は皇后御凱旋の後住吉神社につれかへられしが如何なる故にや、其の馬東に向つて逃走し、今の田邊町の地まで来りて栗畑の中にかくれたり。此の時田邊の住人某之を発見し其の馬を捕へて引き行き、住吉神社に献ぐ、其の功を以て神社より禄を給り、毎日田邊の地より其の馬を引き来るべしと命ぜられたり。住吉、田邊附近一帯、往昔より栗を作らざるは、全く馬のかくれ場所をつくるを避くるためなりといふ。」とあり、朝鮮半島から立派な白馬を連れて帰ったところ、住吉の神様が気に入られ住吉大社の神馬とした。ところが、突然に神馬が出奔していなくなってしまう、搜索したところ、田辺の栗林に隠れていたのを住人が見付けた。これによって住吉大社の神馬は田辺の住人が世話するようになり、田辺の地は住吉さんの神馬の土地とされたという伝承です。さらには、神馬の伝説によって住吉から田辺にかけての地域では栗林が造られなかったとあり、たいへん面白い伝承であると思います。



住吉村における御馬道

さらに、神馬に関する話題としては、江戸時代の飼馬料についてです。住吉大社境内の神馬舎(馬小屋)では、飼馬料として代々の大坂炭屋問屋がこれを世話する習わしがありました。日頃黒い木炭の売り買いを生業としていた人々は、その感謝を表して、神様には黒い物の反対の白い物のお世話をしようということで、神馬の飼料を出したものと言い伝えられています。炭屋問屋がなくなった現在でも、化石燃料を扱う業種を中心に「神馬講」の伝統をつづけておられます。

江戸時代以前も神馬は参拝者から人気があり、神馬にあやかたご利益品がありました。それは「はぎり豆」といいます。資料『神仏霊験記図絵』をご覧ください。これによれば、毎晩の歯ぎしりで煩惱む者は、住吉さんの神馬の飼料から白豆を三粒分けてもらい、これを帰宅して食べればたちまち歯ぎしりが止まる、とあります。おまじない便利帖ともいべき江戸時代の本に、わざわざ特筆されるほど神馬の信仰は篤いものであったようです。

神馬と田辺との関係に由来する道もありました。『住吉村誌』掲載の「東成郡住吉村全図」をご覧ください。かつて「御馬道」とよばれる主要道がありました。住吉村南西の住吉大社から出発し、少し熊野街道を北へゆき神ノ木駅前を北東へ進み、村内の小字をそれぞれ経て北東へ抜けて田辺に至る道でした。この道こそ、神馬が毎日往復した道です。口伝えによれば、神馬をのぞく車両の通行が憚られたといえますから、神聖な道として村人に認知されていたようです。

田辺の地には神馬の厩(馬小屋)があり、毎晩はここで世話されており、住吉さんのお勤めのために日々出勤していたのです。北田辺と南田辺のそれぞれに厩

があり、同じく退落(死去)した神馬のお墓もありました。写真にあるように北田辺には今も住吉大社の飛び地の境内があり、神馬塚として歴代神馬をお祀りしています。なお、現在この神馬塚は、有名なうどんや風一夜薬本舗の隣にあります。明治以前からも神馬の霊は仏式で供養するのではなく、神官によって神式で祀られていたといいますが、住吉大社の神様がお乗りになる、つまり神霊がお遷りになる神聖な存在として、たいへん丁寧に扱われてきたことが分かります。

資料にも挙げておきましたが、白馬神事については、先ほどの踏歌神事と同じく、やはり宮中で行われた行事「白馬節会」が、やがて神社においても行なわれるようになったものといわれます。宮中では廃絶しましたが、いくつかの神社では現存して行なわれています。京都の上賀茂神社(賀茂別雷神社)の「白馬奏覧神事」、茨城県の鹿島神宮の「白馬祭」がともに正月七日に行われています。宮中で途絶えた神事が移されて行われている、そのことだけではなく、神馬と住吉さんに関する数々の伝説が語り伝えられていることが重要と思われま。正月の白馬神事だけではなく、住吉祭をはじめとする大祭には神馬が欠かせない存在であったようです。

御結鎮神事(正月十三日)

正月に行われる弓取りの神事が1月13日の御結鎮神事です。正月に神社の授与品として破魔矢がよく知られていますが、それと同じように、弓矢というのは魔物や邪気を払いやる呪術的な意味があります。少なくともそのように信じられてきました。



『住吉名勝図会』御結鎮神事

江戸時代の『住吉名勝図絵』をご覧ください。この頃は住吉大社の境内の石舞台のあたりで行われていたようです。池をはさんで弓が射られ、反対側に的が置かれています。今でも石舞台のある池の東側にある小高い盛土がそれであり「的山」という名前がありました。今ではそれを知る人も希です。近代からは境内の東南、今の住吉武道館の広場にて、大阪府弓道連盟の有志の方々の奉仕によって奉射が行われています。

そして、毎年5月1日には全国弓道大会が住吉さんで開催されています。それもこれも住吉さんと弓道のかかわりが深いことによります。

神事のみならず、弓というものは武芸百般の筆頭とされてまいりました。武道の代表格でもあった弓道・弓術ですが、今でも皇室にお子様のご誕生された際には、「鳴弦」といって弓の弦をならす儀式があり、弓取りの神事では「墓目(ひきめ)」といって鏑矢(かぶらや)を射放つ儀式も行われていますが、これも弓が魔除けの武具として信仰されてきたことによります。

一般的には武術・武芸の神様といったら八幡さんや、鹿島・香取の神様を思い浮かべられることでしょう。しかし、その武道の長である弓の神、それこそが住吉の神様であります。それについて見てゆきたいと思いません。

資料の「神功皇后縁起絵巻」の一場面をご覧ください。これは豊田八幡宮の所蔵の絵巻物で文化財に指定されているものですが、ちょうど昨年(2010年)の大阪市立美術館で開催された特別展「住吉さん—住吉大社 1800年の歴史と美術—」の図録の表紙にもなった図柄です。ここでは、神功皇后の行く手にたち塞がった大岩に対し、矢を射放つ住吉明神が描かれています。



『神功皇后縁起絵巻』矢を射る住吉明神

また、パワーポイントで映しております画像は、「百々手式」の祭壇です。武家礼法の宗家であります小笠原教場(小笠原流)の奉仕によって特別に行われた弓取りの儀式ですが、国家の大事や特別祈願の時に行われるという最も厳粛な儀式とされます。住吉大社御鎮座 1800年記念大祭の奉祝として、小笠原家の篤志もあって今回特に本式の祭壇を組んでのご奉仕となりました。画像をご覧くださいと、祭壇の最上段、中心に祭られているのが鏑矢であります。つまり、鏑矢がご神体として祭られているのです。小笠原家のお話によれば、この鏑矢は住吉明神をご神体としていたとのことでした。やはりここでも、弓道の厳粛なお祭り対象が住吉さんであることに注目すべきです。



小笠原流「百々手式」祭壇の様子

これに関して資料の『住吉名勝図絵』、住吉さんの御本殿から鎬矢が飛び出している絵図をご覧ください。鎌倉幕府の史書である『吾妻鏡』には、源平合戦で平家追討の命令が下った時に、住吉さんで恒例の神楽をしていたところ、突然に第三本宮から鎬矢が飛び出し西の方へ飛んでいった、そのことを住吉神主の津守長盛が報告したとあります。この直後、平家は屋島の合戦で破れ、やがて壇ノ浦で滅ぶこととなります。平家滅亡との関連性は議論しませんが、住吉さんが国家鎮護に力を発揮される際に、鎬矢が飛び出すという報告がなされるほどの象徴的な記事だと思えます。

江戸時代の住吉の百科事典ともいべき『住吉松葉大記』にも、住吉さんと弓に関する興味深い伝承が書かれています。神功皇后が住吉さんを初めてこの地にまつられた時に、お祭りを行う神主職とは別に、神社を警護する人々を置いたと伝えます。この人々を「土師の弓部」といい、この子孫が住吉さんの社家として代々お仕えて、御結鎮神事の弓取りなどを奉仕してきたようです。住吉さんを守りつづけてきた一族が、そのルーツに弓に関わる集団であったという伝承にも注目されます。

鎌倉時代の儀式を記した『住吉太神宮諸神事之次第』には、御結鎮神事もとより、弓をひく別の神事が見えています。それは「御狩神事」といい、1月10日に社頭において巫女さんたちが男装をして弓をひく神事があったようです。今の1月10日といえば戎さんです。御狩神事と戎さんとの関わりについては、西宮市の広田神社や、えべっさん総本宮の西宮神社などの関連で研究されて、様々な見解が述べられています。江戸時代の『住吉松葉大記』によれば、当時の巫女さんたちはこの神事で男装をするのを嫌がっていたとありますが、弓取りを巫女さんが行ったこと、そして女性たちが男装して神事に奉仕したことを考えあわせれば、神功皇后のお姿そのものを髣髴とさせますから、大変興味深い神事であったようです。

さらにもうひとつ、住吉さんが弓の神様だということについておもしろい説話があります。資料『御伽草子』

の「美人くらべ」というお話です。異母姉妹である宰相の二人の娘は美人で名高かったが、丹後少将は姉姫に通いつめた。これを快く思わない妹の母(後妻)は姫の殺害をはかり、姫はさすらいの身となってしまふ。少将はこれを求めて諸国をめぐり、住吉大社で夢を得て、途中で知り合った翁(住吉明神)に助けられながら姫と再会するお話です。この姫と再会する直前に翁は自分の正体を明らかにするのですが、その場面で「我はこれ日本の弓矢の守護神、住吉の明神なり」と名乗ります。ここで住吉明神がご自身で「日本の弓矢の守護神」と語っているのです。

室町時代の家紋と来歴を集大成した書物『見聞諸家紋』には、武家の源氏と住吉さんの深い関わりについてうかがうことができます。源氏の新羅三郎義光流の一派は「菱紋」をもって一門の紋にしていました。武田信玄で有名な「武田菱」もこの流れになります。この菱紋の由来について住吉さんが関係しています。それによれば、清和源氏の源頼義が奥羽征伐を命ぜられ、武功祈願のため住吉大社に参詣して神託を得たという。それによって、神功皇后が使用した「楯無鎧」の菱紋を用いることになったとあります。ちなみに、住吉大社の社紋は「花菱紋」で、現在も用いられています。

このような源氏と住吉とを結びつける話はいくつもありますが、なかでも弓とのつながりで注目したいのは三ツ矢の伝説です。パワーポイントをご覧ください。皆さんお馴染みの「三ツ矢サイダー」です。この三ツ矢の印のもととなった三ツ矢伝説もまた、住吉さんと弓を結びつける重要な伝承といえましょう。兵庫県川西市の多田という地で、明治時代に天然の鉱水を、三ツ矢印の平野鉱水、三ツ矢平野水と名付けて売り出したといわれています。やがて今日のような三ツ矢サイダーになったということです。川西市の多田には多田神社があり、源頼光・義家・頼朝などの先祖で清和源氏発展の元を築いた源満仲(多田満仲とも)が最初に築いた根拠地といわれています。この多田に根拠を定める際の伝説に住吉さんが関わってきます。源満仲が一門の繁栄を祈願して住吉大社に参籠した時、夢の中で住吉の神様が出現されました。矢をお授けになり、これを射放って落ちたところに居を構えれば一族が繁栄する、といった神託があったと『多田五代記』などの伝説に語り継がれています。この時の矢が三本であったか、三つ羽の矢であったかは定かではありませんが、満仲が神託によって矢を射て、矢が到達したという兵庫県川西市多田の地を居城としたといわれています。どう考えても矢が住吉大社から兵庫県川西市まで飛んでいくとは思えないのですが、住吉さんの威光や信仰などと何らかの関係があってそのような伝説が生まれたのではないのでしょうか。この三ツ矢伝説の地から、後にサイダーの三ツ矢印にまでつながってゆくのです。御結鎮神事をはじめ、弓を通して住吉さんの信仰が見え隠れしています。



「大日本名將鑑」の多田満仲

資料にも示しておきましたが、白馬神事や踏歌神事と同じく、御結鎮神事も古くから行われた宮中の年頭行事とも関わりがあるかと思われます。宮廷でも射礼という弓を放つ行事がありましたが、これも各地で行われるようになって様々な呼び名があります。全国の神社では射礼・歩射・奉射・弓取などといった名前が見られます。もちろん御結鎮につながる名前を伝承しているところもあります。奈良の八坂神社の華鎮祭(通称:弓のけーちん)、奈良の國津神社の結鎮祭などがあり、今は絶えていますが堺市の櫻井神社でも古くは御結鎮祭があったようで、『中村結鎮御頭次第』(堺市有形文化財)という古文書などにも見られます。

おわりに

以上、踏歌神事・白馬神事・御結鎮神事といった正月の特殊神事を取り上げて、それぞれかわりのある住吉さんの伝説を見てゆきました。住吉大社は特定の神徳でもって説明するのが困難な神様です。たとえば、商売の神、学問の神などといった一面性のみでは語れません。和歌の神、お祓いの神、海の神など様々な表現ができます。御田植神事に見るように農業の神であったり、遣唐使の守護神であったことから外交の神であったりと、いろんな側面で見ることができます。今回ご説明申し上げた正月の神事は、なにかと初詣の雑踏のなかにまぎれて世間的には注目されにくいかと

も思いますが、その背景にある伝承や歴史を見てまいりますと、日本の文化や伝統にとっても深く関わっていることが分かります。それには古の人々の信仰と、これを継承してきた先人たちの想いが、住吉さんの信仰とともに息づいています。住吉大社には年間を通してじつに様々なお祭りが行われていますが、その一つ一つを見てゆけば、また新たな住吉さんの魅力を発見できると思います。もちろん、これは神社だけの話ではなく、住吉という地域に根付いた伝統、歴史、文化、そして信仰の証であることに気付くことと思います。昨今、神様とは関係のないただのイベントが「祭」と呼ばれ、本来の祭というものが分からなくなっています。なにも特定の宗教行為ということではなく、とても地域の歴史や風習のなかから生み出されてきた祭を見直す時期が来ているのではないのでしょうか。近年復活した住吉祭の神輿渡御などは、まさに住吉・住之江はもとより堺の町に至るまでの大祭であり、郷土への想いを共有し得るたいせつな存在であると思います。どうか文化資源としての祭・神事を見直していただき、地元理解の一助にさせていただけたら幸いです。ありがとうございました。

財団法人住吉隣保館の動き

財団法人住吉隣保館設立50年 故住田利雄さん生誕100年 記念集会

400名以上が参加し、超満席になった市民交流センター一大ホールで、10月29日(日)午後3時から、「財団法人住吉隣保館設立50年、故住田利雄さん生誕100年」記念集会がおこなわれました。

開会挨拶では、友永健三実行委員長が、昨年7月から記念事業実行委員会を立ち上げて取り組んできた経過、記念事業のねらい(先人の精神と経験から学ぶこと、人と人のつながりを強化すること、今後の住吉の地における人権のまちづくりに役立てること)、その集



大成が今集会であること、について述べました。

次に、多くの来賓を代表して、北口末廣部落解放同盟大阪府連委員長、中本順一大阪市人権協会理事長、高橋秀樹住吉区長から、挨拶をいただきました。

その後、友永健吾実行委員が、スライドを使って財団設立 50 年、故住田さん生誕 100 年を説明しました。閉会挨拶では、住田利雄さんの長男、住田一郎さんが、集会開催や参加について感謝の意を表し、父親と部落問題について喧々諤々と議論したなどの思い出や、これからも「部落問題」にこだわって生きていきたいという自身の決意などを述べました。



『大川恵美子画集目録』を作成して

友永雄吾
国立民族学博物館外来研究員
佛光大学・大阪産業大学兼任講師

はじめに

住吉をはじめ全国の部落解放運動を牽引してきた故大川恵美子さん。彼女には運動家としての顔以外にもいくつかの顔がありました。なかでも絵の才能に長けていた彼女は、住吉部落の昔の暮らしぶりや仕事などを描き出し、手がけた作品は 108 点にのぼります。



お好み焼き屋

目録の作成

私は現在、財団法人住吉隣保館で住吉の民具や絵画を集め管理する目録と、それを検索して再利用できるようにするデータ・ベースづくりに取り組んでいます。目録とデータ・ベースを作成するためには、そのベースとなる資料登録票を作る必要があります。そこで、資料の詳細を示すため①標本資料番号、②資料名、③地域(使用地域、作成地域など)、④作成者、⑤収集者、⑥注記、⑦寸法、⑧受入年度、⑨記入者、⑩画像とその撮影者に項目を設

定し登録票をつくりました。それを簡略化したものが目録になります。

絵画にみる世界

絵画の内、57 点は水彩画で、51 点がスケッチでした。108 点の作品のうち、99 点が住吉の仕事と暮らしに関する絵で、自画像 3 点を含む 9 点が人物画です。住吉の仕事と暮らしに関する絵画を分類すると①衣・食・住に関する絵が 53 点、②仕事に関しては 15 点、③年中行事の関連画が 8 点、④運動や差別を風刺した絵が 12 点、⑤その他に大別できます。そこでは、厳しい差別の中を生き抜く住吉の人びとの「知恵」や「ユーモア」が、独特なタッチで描かれ、その人びとをひととき引き立てているのが、細部に至るまで精巧に描かれた背景です。それは、まるでカメラで撮影したかのごとき世界で、そこには冷静に世の中を見渡す観察者としての大川さんがみうけられます。



春駒



青年湯

目録の活用方法

大川さんの世界はデジタル化され目録化されました。今後、それをデータ・ベース化し財団ホームページに載せることで広く社会に公開することができます。それは次号で報告予定の民具目録と併用することで、住吉地区の歴史や知識を現在に蘇らせ、次世代へ引き継いでいくための財産になると考えます。まずは、大川ワールドを覗いてみてください。

『住吉民具目録』を作成して

友永雄吾

はじめに

住吉民具目録がようやく完成しました。今回あきらかになった資料件数は合計 281 件。使用年代が正確に把握できないため、1988 年に出版された『住吉のくらしと仕事』の記録と「文化庁分類」にもとづいて分類基準を定め分析をおこないました。

財団法人住吉隣保館が所蔵していた民具は 126 種類。そのうちの 43 種類の民具については、1 点以上確認することができました。最も多く重複する民具のベスト 3 は、カンナ 29 件、雪駄 12 件、下駄 11 件となります。ただし、原材料などを含む雪駄に関する民具の数は 22 件、下駄のそれは 29 件に上り、3 位の下駄と 1 位のカンナは、ともに 1 位の地位を占めることになります。

民具分類について

図書館にも日本 10 進分類法があるように民具にも分類法があります。民具分類は「文化庁分類」ともよばれ、それは文字通り文化庁が定めたものです。

内訳は、1.衣食住、2.生産・生業、3.交通・運輸・通信、4.交易、5.社会生活、6.信仰、7.民俗知識、8.民俗芸能、9.競技・娯楽・遊戯、10.人の人生、11.年中行事、12.口頭伝承に分類されます。ただし、ここで定義された分類では、分類できない民具も出てきており、現在は再定義の必要が議論されています。今回の調査においても、既存の民具分類では分類しきれない民具が多数ありました。ひとつの民具がいくつかの項目に重なっているため、その分類後の合計数は281件よりも大きく449件になります。



民具にみる住吉のむら

上記の限界をふまえながら分類項目に従い281件の民具を分類すると次の大別ができました。衣食住では128件、生産・生業では187件、交通・運輸・通信は45件、交易は61件、社会生活では2件、信仰では1件、民俗知識では3件、民俗芸能は4件、競技・娯楽・遊戯では4件、人の人生は1件、年中行事は13件、口頭伝承は0件でした。そこでは仕事に関する民具が多く、それは雪駄や下駄、さらに靴直しに必要となる原材料やカンナなどの道具であり、またそれは行商に必要となる天秤棒やチギ、さらに大八車などです。

これら民具を注意深く観察すると幾つかのことがわかります。とりわけカンナはひとつとして同じ形のものがないのです。つまり、当時の住吉の人びとは、その時々状況に応じて道具を改良し、下駄作りや靴直しが効果的におこなえるよう工夫していたことがわかるのです。



住吉民具収集の過去、現在、未来

ところで、この281件の民具は、住吉の古い家が壊され新しい公営住宅建設が次々と着工されていった1970年代、生前の大川恵美子さんによって収集されたそうです。大川さんから民具の大切さを教わった小住さんによる

と、「大川さんは工事がおこなわれない休日の合間をみて、空き家をひとりで歩き回り、いらなくなった民具を集めた」とのことです。また、その時に収集された民具件数は現在の倍以上の数であったそうです。その集められた民具は、まず現在の寿湯が再建される前にあった「老人憩いの家」の仮設資料館に1986年から保管され、寿湯が1995年に再築工事に入ると仮設資料館も壊され、1号館へと民具の保管先が移されました。



その1号館が2006年に建て替え工事に入ると、民具の取捨選択がおこなわれ、結果281件の民具が選別されて財団法人住吉隣保館の倉庫に保管されることになりました。

現在これらの民具は、地元在住吉小学校において「地域学習」の一環としても活用され、次世代の育成においても重要な役目を果たしています。

民具目録の作成をおえて

個人的にはこの目録を完成させ、住吉の人びとのくらしと仕事の姿を過去から現在に記録することができたと思います。しかし、民具目録とそのデータ・ベースは誰もが活用でき、それを更新することができて初めて完成するといえます。すなわち後継者のためのマニュアル作成が次に残された作業であることがわかります。また、民具分類は所蔵民具の全体像を示す指標としては役立つものの、民具それぞれの特徴や人びとの生活の息づかいについては把握しきれない限界を持っています。その限界を補うために、目録とデータ・ベースを作成するためのベースとなる資料登録票(前回ニュース「大川恵美子画集目録を作成して」を参照)との併用が重要になるでしょう。ともあれ、今回の民具分類の作成は、厳しい日常生活を工夫することで乗り切ろうとした住吉の先人の知恵と努力を再確認する機会となりました。この先人たちの生活から生み出された知恵は、今日の私たちの日常生活にも役立つものであると考えます。

■財団法人住吉隣保館ホームページアドレス

<http://sumiyoshi.or.jp>